

遺 伝 子 診 療 部

野村 文夫

ヒトゲノムが解読され、各種疾患の遺伝素因の解明と解析技術が急速に進み、遺伝子情報を直接診療に活用する場面が多くなっている。

遺伝情報に基づく疾患感受性の予測、遺伝性疾患の発症前診断、出生前診断・着床前診断などでは、これまでの医療とは異なる次元での心理社会的倫理的諸問題に直面することが少なくない。したがって、これらの問題にチーム医療として適切に対処できる横断的診療部門が大学病院などの高度先進医療機関では不可欠とされ、2009年11月に開催された第7回全国遺伝子医療部門連絡会議の参加施設は78施設に達している。

千葉大学医学部附属病院における遺伝医療のルーツは1978年4月にさかのぼる。当時産婦人科学教室の新井一夫医師が1989年9月まで産科領域の遺伝相談を担当されていた。その流れは現在も周産期母性科の長田久夫診療教授に受け継がれている。当院における遺伝医療はこれまでは関連診療科の診療の枠の中で個別に実施されてきた。しかし、横断的中央診療部門として対応する必要性を感じていた学内の有志を中心に院内関連部署間で協議を重ねた結果、2003年4月に検査部内に遺伝子検査室に併設される形で遺伝カウンセリング室が発足した。ちょうどこの時期に、旭川医大において遺伝子診療部の立ち上げを経験されていた公衆衛生学の羽田明教授と石井拓磨助教が千葉に赴任され、メンバーに加わって頂けたことは我々にとって天啓というべきものであった。

当初は遺伝子検査室に提出される家族性腫瘍や神経変性疾患の発症前診断などの検査前カウンセリングを主に担当していた。その後多くの診療科の参加協力を得て、活動範囲を拡げ、2008年2月には遺伝子診療部として独立部門となり、責任者（遺伝子診療部長）は検査部長の野村が兼務することとなった。院内外のケースを対象として、1）遺伝病とその遺伝形式、発症リスクに関する説明、2）最新の遺伝子検査関連情報の提供と検査の実施、3）発症前診断・出生前診断前後の心理的・社会的サポートなどを担当し、年間の症例数は100例を超えるよう

になった。当院の遺伝医療チームの構成は下記の通りである。

検査部・遺伝子診療部	野村文夫、松下一之、澤井摂、西村基、梅村啓史、宇津野恵美、糸賀栄
婦人科・周産期母性科	長田久夫、木原真紀
小児科	下条直樹
神経内科	金井数明
泌尿器科	市川智彦
薬剤部	有吉範高
地域医療連携部	葛田衣重
心理カウンセラー	浦尾充子、難波江玲子
公衆衛生学（小児科）	羽田明、鈴木洋一、石井拓磨
博士課程・修士課程（遺伝カウンセラー養成コース）	大町和美、峯尾アヤ、梅田果林

千葉大学医学部附属病院における遺伝医療チーム
(平成22年9月29日現在)

この間、2004年1月には臨床遺伝専門医制度研修施設に認定され、2005年4月には千葉大学医学薬学府修士課程に認定遺伝カウンセラー養成専門課程（責任者は羽田明教授）が設置され、人材育成の体制も整った。2007年11月には第5回全国遺伝子医療部門連絡会議を千葉大学が主管としてけやき会館にて開催した。

一方、遺伝子情報はいわゆる個別化医療のためのファーマコゲノミクスとして、「薬剤による有害事象の回避と必要投与量の確保のためのホスト側の遺伝情報の解析」「分子標的治療において薬効が期待される腫瘍の体細胞変異の解析」などを目的に活用されはじめている。遺伝子診療部は薬剤部、病理部、検査部などの他の中央診療部門との連携を密にしながら、ファーマコゲノミクスの医療応用にも積極的に取り組んでいる。

附属病院内にはすでに疾患プロテオミクスセンターが設置されているが、将来的には遺伝子診療部とプロテオミクスセンターを合体させ、遺伝医療・個別化医療・プロテオーム診断を推進するポストゲノム診療部（仮称）に発展させることが計画されている。

(のむら ふみお)